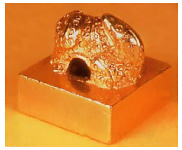
漢印・封泥・磚文・瓦当文その他の文字

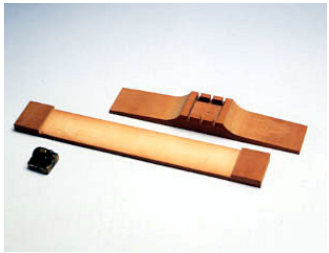
漢印

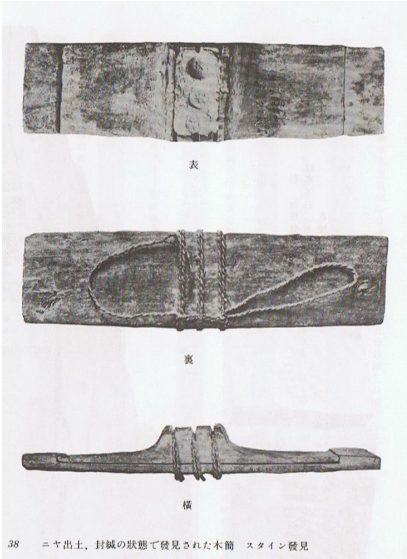
玉石印や銅印が発達した。文字は「印篆」とよばれる篆書をデフォルメしたものが刻された。官吏は役職を示す印をベルトにつけていた。官職に就くことを「印綬を帯びる」と言う。紙が一般に普及し始めた魏晋南北朝時代までは、倉庫の封印や容器の封印、木簡・竹簡の束を止める「封泥」に押していた。官印のほかに私印があった。官印は青銅製が中心で瓦鈕が最も多くついで亀鈕が多い。私印も青銅製が中心で鈕は多種多様であった。



封泥

検と印章の模型





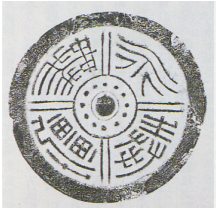
瓦磚文

瓦当文と磚文のことをいう

「磚」とは焼成煉瓦やタイルのこと。

「瓦当」とは、屋根瓦の軒の部分に突き出た円筒状の瓦のこと。

その先端に文字（主に小篆）や紋様が描かれた。それを瓦当文という。円形の平面に自在に変形された小篆が配置されている。



嘉量銘（かりょうめい）

貨幣

新の「貨泉」など。

碑額（ひがく）

漢碑の碑額。

鏡銘（きょうめい）

隷書が正式書体になる（石碑の流行）

隷書は古隷・八分隷（八分・分隷・分書ともよぶ）・漢隷などに分類される。

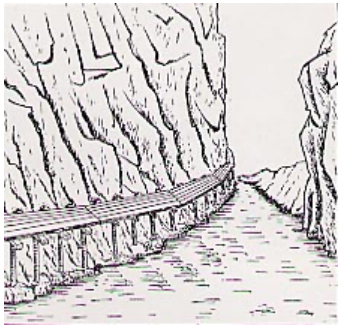
古隷または刻石体

群臣上醻刻石（前漢・前158）「趙二十二年刻石」ともいう。前漢最古の刻石。1行・15字。字大10cm。125×30・5cm。古隷に篆書がまじっている。

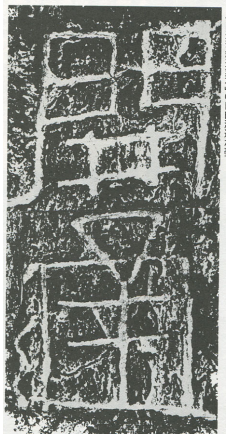
魯孝王刻石（前漢・前56）「五鳳二年刻石」ともいう。

莱子侯刻石（新・16）

開通褒斜道刻石（後漢・66）　古隷。

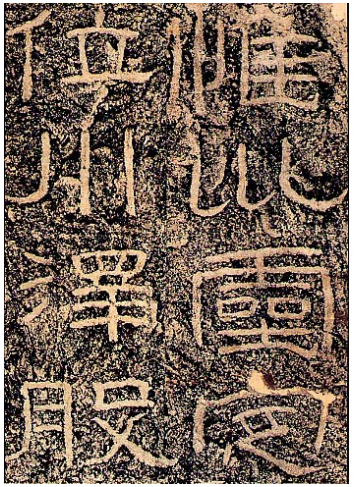


褒斜道の桟道の想像図



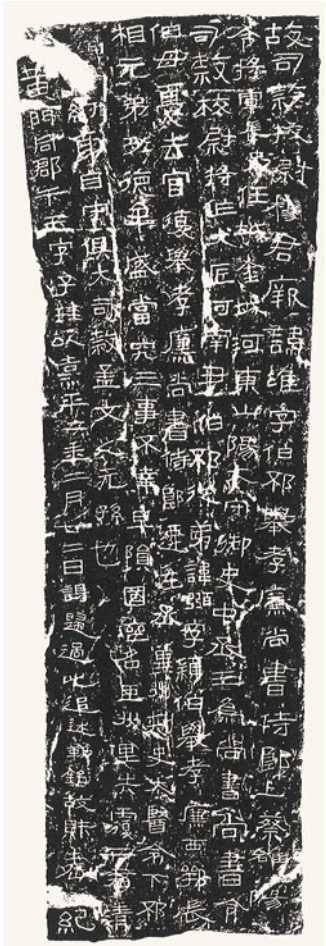
隷書の黄金期（後漢・140年代～180年代・この50年ほどの時期に八分隷の石碑は集中して刻されている。漢碑は七百近く建立されたらしい。）用筆法が直筆から側筆へ変化し始める。「筆の芸術」としての書道が始まり、書の黄金時代である六朝時代を準備した。

石門頌　部分（後漢・148）　八分隷。



漢中の摩崖碑。「司隷校尉楊孟文石門頌」ともよぶ。楊孟文の功績を讃えた碑。記念碑。書風は飄逸。自由闊達な運筆、野趣あふれる。陝西省褒城県北の褒斜道石門の岸壁にある。縦205×横185㎝、22行、1行に30～37字。字幅は約7㎝。

「石門」は褒斜道の南端にある長さ15メートルほどのトンネルである。「石門頌」はこの石門の中の西側の壁に刻されていた。1973年、ダム工事に伴い削り取られ、今は漢中市博物館にある。



楊淮表紀（後漢・173）八分。

北海相景君碑（後漢・143）八分。

乙瑛碑（後漢・153）八分隷の代表。

碑石・碑高260㎝、碑幅129㎝。18行、1行40字。

礼器碑（後漢・156）隷書の極則、漢隷の第一と称される、八分隷の最高峰と言われている。

碑高215㎝、碑幅91・5㎝。「曹全碑」と並ぶ漢碑の双璧。漢隷の到達点ともいわれ、隷書学習者必修の碑。「孔廟三碑」の一つ。桓帝の時の魯相の韓勅の顕彰碑。「韓勅碑」「魯相韓勅造孔廟礼器碑」（ろしょうかんちょくこうびょうのらいきをつくるひ）「韓明府修孔廟碑」などとも呼ばれる。山東省曲阜市の孔子廟にある。縦165㎝、横74㎝。四面に刻されている。碑陽は16行、各行36字。書風は温雅、素朴でもなく流麗でもなく中和、瘦勁で清潔な線、理智的、精妙、厳正。八つの書風があると言われている。

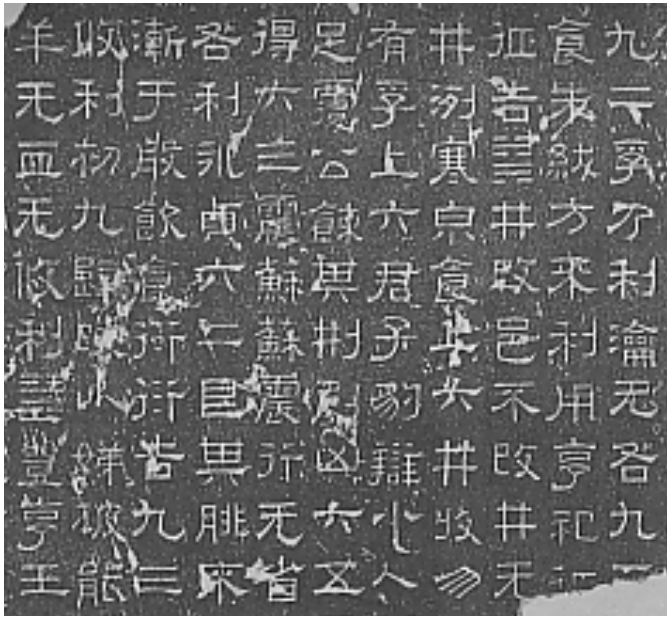
史晨碑（後漢・169）八分隷の典型。

端正で癖の少ない隷書。縦231横112㎝。前碑は17行、各行36字。「孔廟三碑」の一つ。「魯相史晨奏祀孔子廟碑」（ろのしょうししんこうしびょうをまつることをそうするひ）「魯相晨孔子廟碑」などとも呼ぶ。碑陽は祭儀の成功を記念した内容で「史晨前碑」と呼ばれ、碑陰は「史晨後碑」と呼ばれる。山東省曲阜市孔子廟にある。書風は謹厳、沈着、温雅で品格がある。

西嶽華山廟碑（後漢・165）八分。

原碑は失われて、拓本のみ伝わる。方整、流麗、奇古を兼ねそなえている。神廟碑。

西狭頌（後漢・171）八分。摩崖碑。



熹平石経（後漢・175～183）八分。『周易』の残石　西安碑林蔵

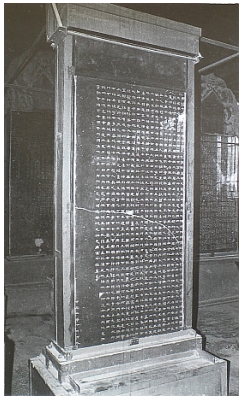
中国の芸術観の中心にある思想（『荘子』内篇・人間生篇・第四にある）

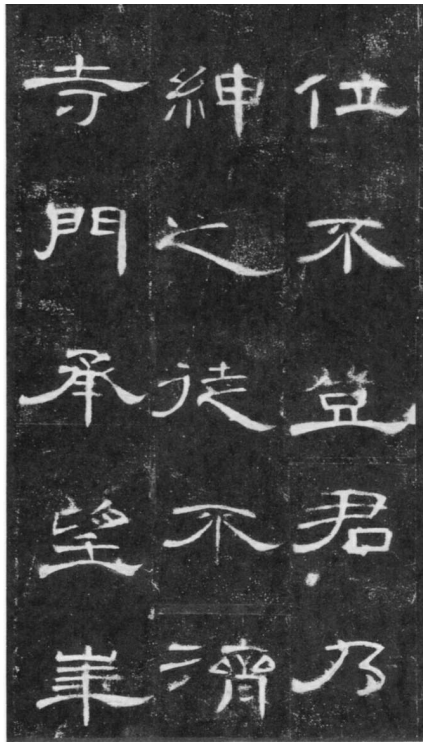
「與天爲徒」（天と徒となる）・「天与徒と為る」・絶対の世界（天地自然の道）の住人となること。

「與古爲徒」（古と徒となる）・「古与徒と為る」・過去の世界（古の優れた人々の世界）の住人となること。

尹宙碑（後漢・177）八分。墓碑。穿孔がある。

曹全碑（後漢・185）漢隷八分の代表。「礼器碑」と双璧をなす。





張遷碑（後漢・186）八分。縦315㎝、横102㎝。碑陽は16行、各行42字。

魏の曹操立碑の禁（後漢・205）石碑の建立禁止令。**墓誌の発達**　**墓誌銘**の登場

隷書の基本構造

一、全点画が逆入・蔵鋒で始まる。中鋒となる。これらは篆書と同じ（逆入平出）

二、運筆の速度、筆圧は一定で変化しない。これらは篆書と同じ。

三、原則として横画水平、縦画垂直、左右対称。これらは篆書と同じ。

四、全点画に「波勢」というリズムがある（「波勢」とは文字全体にある波のようなリズムのこと）

五、主横画に、波磔（波発・波・波拂という）がある（一字一波の原則）

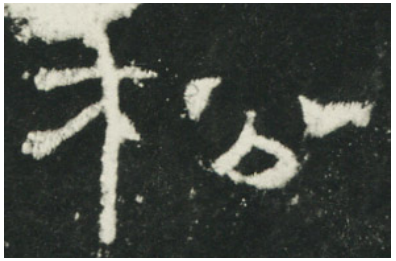
六、転折は二筆で書く（転折部が角張る）

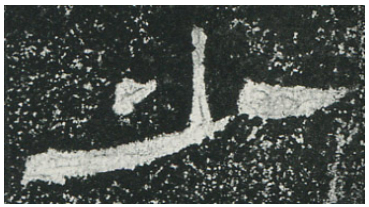
七、横画主体で字形は扁平。

八、左軽右重

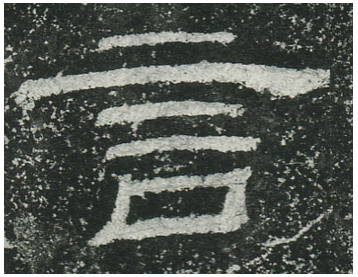
九、波勢挑法（左右の払いとはね上げ）「挑」とは「はね」の意。

横画の**波勢**の観察（乙瑛碑より）　縦画の波勢（反S字状）（礼器碑より）　点（乙瑛碑より）

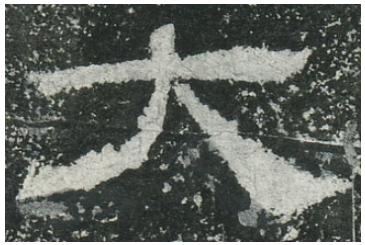




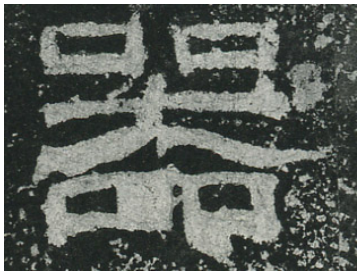
転折部（乙瑛碑より）



斜画（乙瑛碑より）



結構法（結体法）（乙瑛碑より）



学習の基本

・「心手相応」・・・見るということと、手の訓練が相伴なわなければならないということ。また「骨法」（骨格）を学ばねばならない。こまかいところまでよく観察して、形をそっくりに写すこと。

篆隷楷の基本構造の違い

説文篆文

韓仁銘

雁塔

語句注

婉麗（えんれい）：姿や文章などが、しとやかで美しいさま（こと）
温雅（おんが）：穏やかで上品なさま（こと）
華麗（かれい）：はなやかで美しいさま（こと）。ゴージャス。
奇怪（きかい）：不思議なさま（こと）。あやしい。
謹厳（きんげん）：軽はずみなところがなく、まじめでおごそかなさま（こと）
厳粛（げんしゅく）：おごそかで心が引き締まるさま（こと）
厳正（げんせい）：基準に厳格に従って、公正に取り扱うさま（こと）
剛毅（ごうき）：意志がしっかりしていて物事にひるまないさま（こと）
高逸（こういつ）：気高く優れているさま（こと）
高古（こうこ）：気高くて古風なさま（こと）
渾厚（こんこう）：大きくてどっしりしているさま（こと）
古雅（こが）：古風でみやびなさま（こと）
古拙（こせつ）：アルカイック。技術的にはつたないが、古風で素朴な趣のあるさま（こと）
質樸（しつぼく）（質朴）：飾り気がなく素直なさま（こと）
洒脱（しゃだつ）：あかぬけしているさま（こと）
自由闊達（じゆうかったつ）：心がおおらかで、物事にこだわらないさま（こと）
遒勁（しゅうけい）：力強いさま（こと）
遒逸（しゅういつ）：力強くすぐれているさま（こと）
遒麗（しゅうれい）：筆づかいが力強くてうるわしいさま（こと）
秀麗（しゅうれい）：整った美しさのあるさま（こと）。グレイスフル。ビューティフル。
重厚（じゅうこう）：重々しく落ち着いているさま（こと）
瀟洒（しょうしゃ）：あかぬけているさま（こと）エレガント。スマート。
整斉（せいせい）：整いそろっているさま（こと）
精妙（せいみょう）：細部まで見事にできているさま（こと）
戦筆（せんぴつ）：震えおののく筆。
瘦勁（そうけい）：細くても強いさま（こと）
超逸（ちょういつ）：すぐれぬきんでるさま（こと）
暢達（ちょうたつ）：のびのびとしているさま（こと）
沈着（ちんちゃく）：落ち着いていて驚かないさま（こと）
典雅（てんが）：整っていて上品なさま（こと）。みやびなさま（こと）。
飄逸（ひょういつ）：世の中の事を気にせずのんきなさま（こと）
品格（ひんかく）：品位。その物から感じられるおごそかさ。
方正（ほうせい）：きちんとしていて正しいこと。
野趣（やしゅ）：野性味。自然のままの、素朴な味わい。
雄健（ゆうけん）：力強いさま（こと）
雄偉（ゆうい）：おおしくたくましいさま（こと）
優雅（ゆうが）：やさしい美しさのあるさま（こと）。上品でみやびやかなさま（こと）
雄渾（ゆうこん）：力強く、勢いがあって雄大なさま（こと）。パワフル。
優美（ゆうび）：上品で美しいさま（こと）。エレガント。グレイスフル。
流麗（りゅうれい）：調子がなめらかで美しいさま（こと）

石刻（せっこく）

石に刻したものを石刻または刻石などという。石刻には、碑刻（ひこく）・摩崖（まがい）・画像石題記（がぞうせきだいき）・闕（けつ）などがある

碑碣（ひけつ）（「いしぶみ」のこと。「碑」は四角い板状の刻石。「碣」は円形や自然石に近い刻石をいうことが多い）

碑　史晨前碑

碣

敦煌太守裴岑紀功碑（とんこうたいしゅはいしんきこうひ）

摩崖（まがい）

画像石題記（画像石とは祠堂や石室、墓室、食堂の壁面の塼に描かれたレリーフのこと。その周囲に刻された文章を画像石題記とよぶ。）

陽三老石堂題記（後漢・106）

闕（宮殿、祠廟、冢墓などの前に建てられた門）石で積み上げた石柱のこと。

嵩山「啓母闕」全景

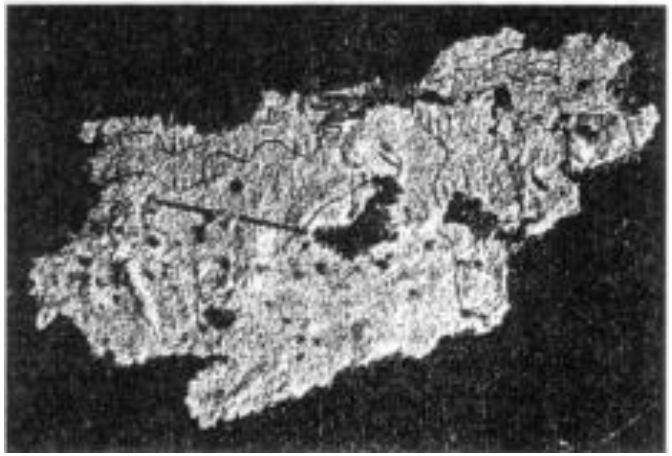
「啓母闕」部分

沈府君神道闕

後漢の105年蔡倫（さいりん）によって紙が完成された。

紙は、中国で発明され人類の発展に貢献した四大発明（火薬・羅針盤（らしんばん）・印刷術・紙）の一つである。「紙」という字は甲骨文・金文にはない。『説文（せつもん）』の説明では「絮（じょ）の一苫（いっせん）（または竹冠に沾）なり」とある。「絮」とは絹のくずのことであり、「一苫」とは薄く伸ばしたもののことであり、「絹のくずを薄く伸ばしたもの」の意である。『説文』の書かれた一世紀の頃には紙はあったが、それはまだ書くためのものではなかったと考えられる。紙は晋代（しんだい）（三世紀～四世紀ころ）には広く使われるようになったと考えられている。また、紙の普及は文字の普及にも役立った。筆・紙・墨の改良が書法を大きく変革していく。

蔡倫（さいりん）は樹皮・麻くず・ぼろ布・魚網をもちいて紙を作ったらしい。世間の人は蔡倫の作った紙のことを、「蔡侯紙（さいこうし）」とよんだ。その後、蔡倫の弟子の佐伯（さえき）がさらに改良して「佐伯紙（さえきし）」を発明している。これらの紙はイスラムを経て西洋に伝わった。



『説文解字』（後漢・100）許慎著

古代中国の宇宙論（文字による世界観）、哲学の書物である。漢字辞典の祖。略称『説文』。

忘れられていた篆書を基本に文字を整理した世界最古の字引。の後漢の**許慎**により西暦100年に完成され、121年子の許沖により朝廷に献上された。許慎の生没年は不明。

全十五篇。本文は第1篇から第14篇までで、第15篇は許慎の序文（「許叙」という）

9353の漢字（親字として掲げられる小篆。まれに古文や籀文が親字となる）を540の部首に分けている。重1163字。

「重」とは「重文」のことで古文や籀文で掲げられている。これらは小篆と同一文字で字体の異なる異体字のことである。古文（説文古文という）は479字あり、金文に近い姿である。

王国維は戦国時代に秦以外の六国で使われていた文字（六国古文という）で、籀文から発展した文字と考えた。（西方の籀文→大篆→小篆。東方の籀文→古文の説）「古文・籀文なるものは、東西二土の文字の異名なり」

序文には漢字の起源、漢字の成り立ちと変遷（六書）、著わすにいたった理由、使うための留意点などが書かれている。

「説文解字」とは「文を説き、字を解す」書物、という意味である。（文字を解説する書物という意）文字とは漢字全体のことを意味する語であり、漢字という語は当時はなかった。

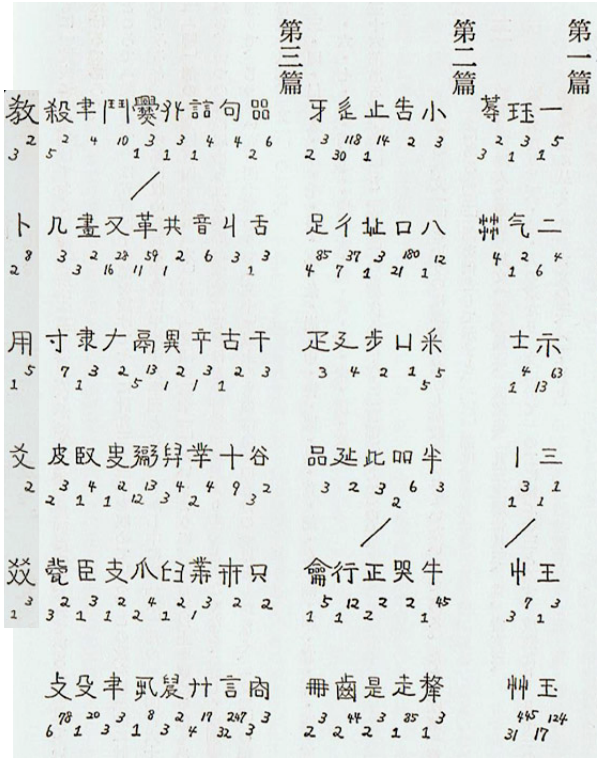
「文」とは、山・水・馬・鳥・犬などのように、倉頡が文字を創った時の、ものの特徴をとらえてかたどったもの、それ以上に分解できない単体のものをいう。「もよう」ともよぶ。原義は、あやもようの意。

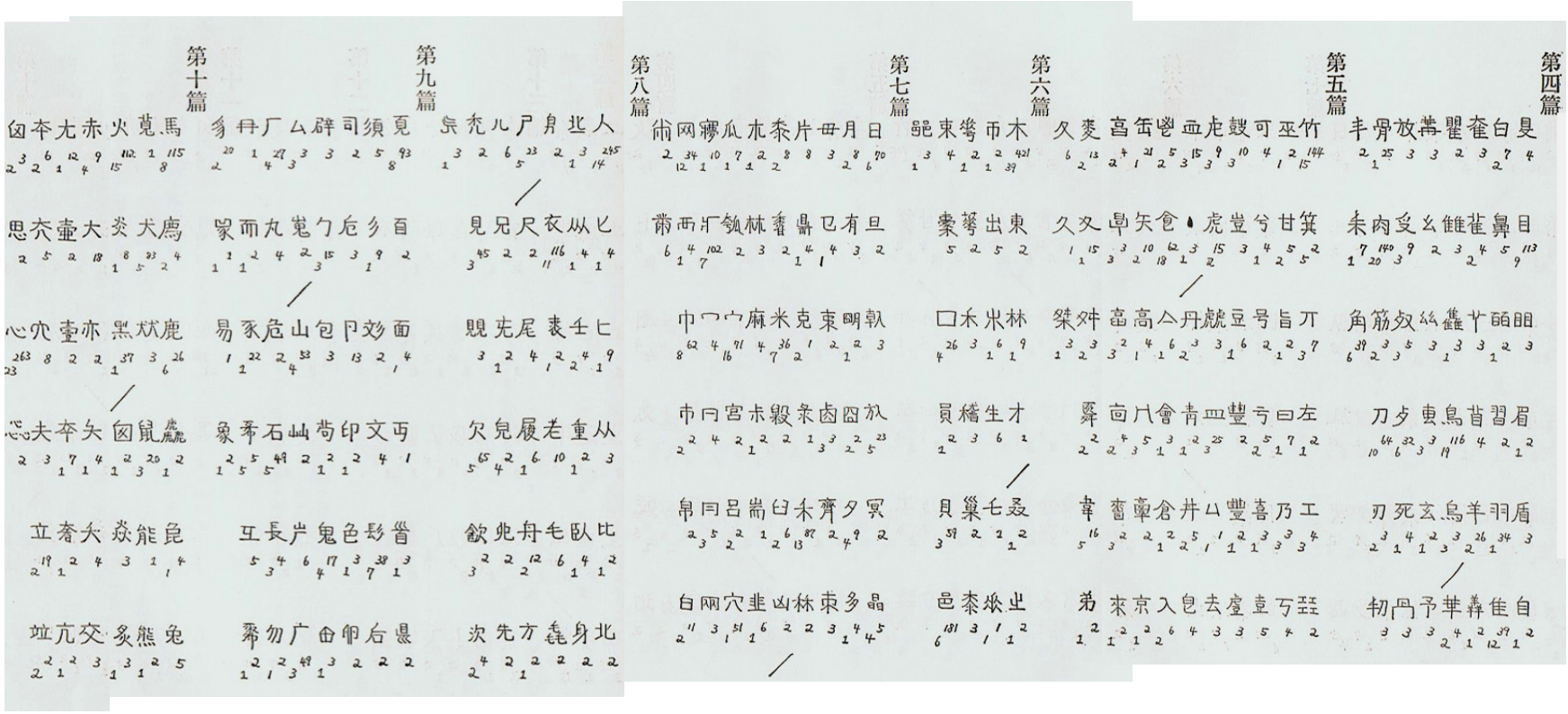
「字」とは、いくつかの「文」が合わさって作られた複体のものをいう。いろんな形や発音符をくっつけて作られたものをいう。崎・澄・駒・鶴・狗など。「字」の原義は、家の中で子どもを生み育てる意。

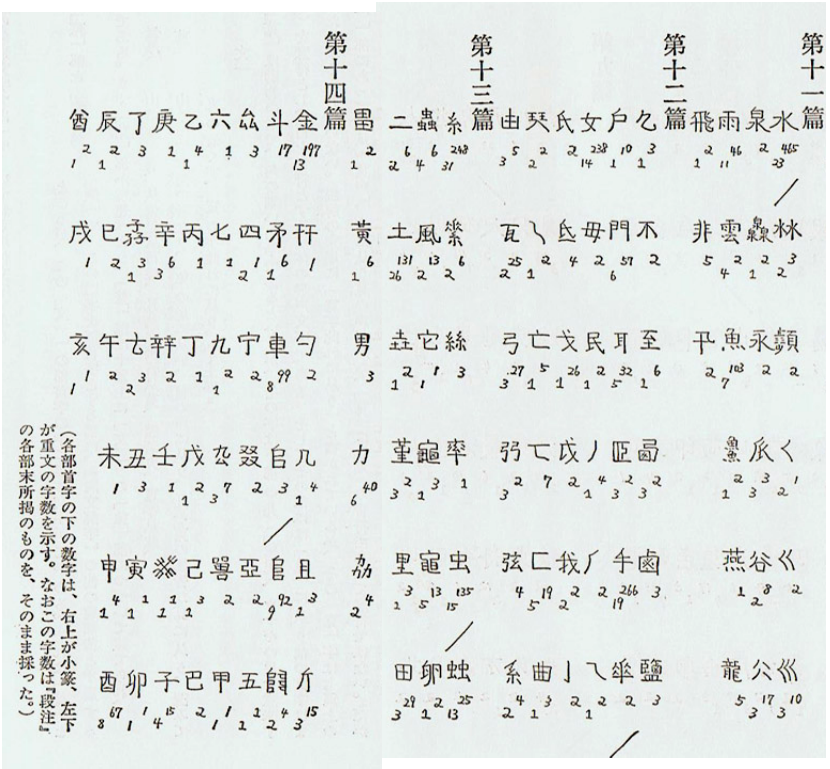
漢字の三要素

漢字の三要素である**形・音・義**が記されている。字形（表記するための形）・字音（音声）・字義（意味）のこと。この三要素が複雑に絡み合って漢字は存在している。

五百四十部総目（『段注』による）




第十篇
第九篇
第八篇
第七篇
第六篇
第五篇
第四篇



部首法（許慎が創造した方法）

五百四十の「部」を建てて、そこに文字を分類する法である（後のほとんどの字書の部首引き索引の基礎となった）許慎の意図は、文字により世界のモデルを創ることにあった。（「一」を立てて始めとし、同類のものは集め、異類のものは群ごとに分ける。・・・この方法を拡げのばして万象のすみずみまで究明し、最後に「亥」に至って、事物の変化を知り、宇宙の根本原則をきわめる）「許叙」より。万物の根源である「一」部から始まり、本篇の最後に干支（十干と十二支）を置き、十二支の最後の「亥」で終わる。

五百四十という数は『易』の陰陽思想からきている。『易』では陰と陽の二気により万物ができたと説く。古代の人々にとって数字は天地の動きを象徴する神秘的なものであった。陽は九（奇数）で象徴。陰は六（偶数）で象徴。奇数の根源である「一」は陽、偶数の根源である「二」は陰の数である。陽は天を、陰は地を象徴する。この九と六を掛けて五十四としそれを十倍して五百四十とした。五百四十という数はここからきていると考えられている。『易』の哲学は宇宙を天・地・人に分ける。これを、「三才」（また「三材」「三極」）という。許慎はこの「三才」の哲学によって部首を配列した。「天」を最初に、「人」を中間に、「地」を後ろに置き、その枠組みに五百四十の部を配列した。許慎は文字を並べることによって宇宙（三才の哲学）を再構成しようとしたのである。

『説文』は陰陽五行説に基ずきつくられた文字による宇宙の再現である。

本文冒頭の**「一」部**・・・「惟初大極、道立於一、造分天地、化成萬物、凡一之屬皆从一」

惟れ初めの太極、道一に立つ、天地を造分し、万物を化成す、凡そ一の属皆な一に从う。

（「一」の本義）この宇宙のはじまりに際して道（真理）の拠って立つもの、森羅万象の根源であり、そこから天と地が分かれ、万物が産み出されたのである。文字の世界もまず宇宙の根源である「一」から始まる。この部の中に「天」がある。

「人」は第八編の冒頭にある。「地」は第十三編の「土」の部にある。

本文最後の第十四編最後の**「亥」部・・・**「荄也。十月，微陽起，接盛陰。从二，二，古文上字。一人男，一人女也。从乙，象褱子咳咳之形。春秋傳曰、亥有二首六身、凡亥之屬皆从亥、口、古文亥、亥爲豕、與豕同、亥而生子、復從一起、」

荄なり、十月、微かなる陽起こり、盛んなる陰に接す、二に从う、二は古文の上の字なり、一人は男、一人は女なり、乙に从う、子を懐きて咳咳するの形に象どるなり、『春秋伝』に曰く、「亥は二首六身有り」と、凡そ亥の属皆な亥に从う、口、古文の亥、亥は豕為り、豕と同じ、亥にして子を生み、復た一より起つ。

「亥」で『説文』は終わるが、また一から始まる。「一」から始まって「亥」で終わりまた「一」にもどり循環する。「易」とはトカゲのように色が変化するものの意である。陰と陽の対立の中、無限に変化しながら宇宙は永遠に循環する。

（注）**陰の例**…影・暗・柔・水・冬・夜・植物・女

陽の例…光・明・剛・火・夏・昼・動物・男

陰陽互根…陰があれば陽があり、陽があれば陰があるように、互いが存在することで己が成り立つ考え方。

六書（六は特別な数字であった）

許慎の『説文』作成の動機は、今文学者による誤った経書の解釈を廃し、正しい解釈を示すためであった。経書は人間の生き方の規範を述べた書物（「六経」易・詩・書・礼・楽・春秋）で、それは文字によって作られている。だから経書の正しい解釈は文字の正しい解釈から始めるべきだと許慎は考えた。

古文学派の中心人物の劉歆を中心に体系づけられていた「六書」の学説を、許慎は文字解釈の原則とした。劉歆は許慎の学問の祖である。劉歆は王莽のブレーンであった。

（注）古文経書は前141年ころ（前漢武帝即位のころ）孔子旧宅などの壁から出現した。この後古文学派が出てくる。

一、象形（ものの形を象ったもの）　日・月・山・木・目・女・門など

二、指事（形のない抽象的な概念を表すもの）　上・下・本・末・一・二・三など。

三、会意（意符どうしを組み合わせて別の意味を表すもの）　信・武・林・炎など。

四、形声（意符と音符とを組み合わせたもの。形は意味、声は発音）　清・精・静・晴など。

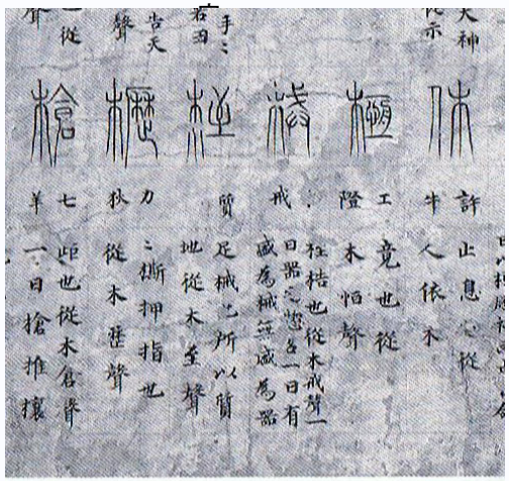
五、転注（原義をおし広めて、別の意味を導きだしてゆく方法）　行（十字路→道にそってゆく→おこなう）・益（水が皿からあふれだす→まし加わる→もうけ）・楽（音楽）→楽（たのしい）・悪（わるい）→悪（にくい）など。

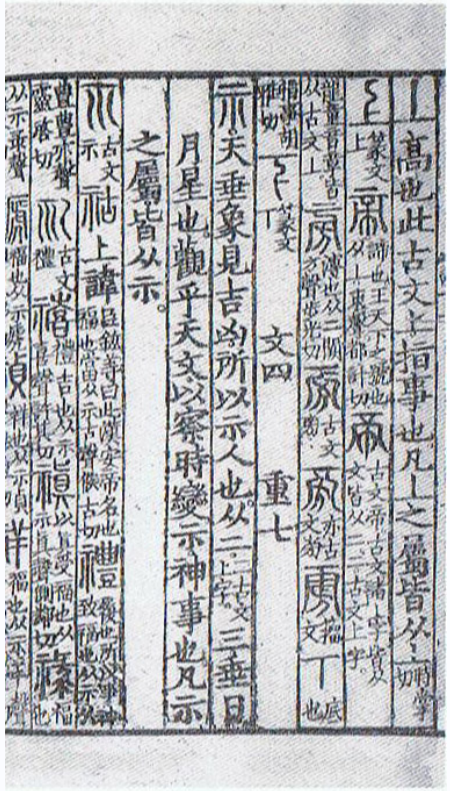
六、仮借（音だけ借りて事物を表す。宛て字）　亜細亜・紐育・釈迦・基督・印度・南無阿弥陀仏など。

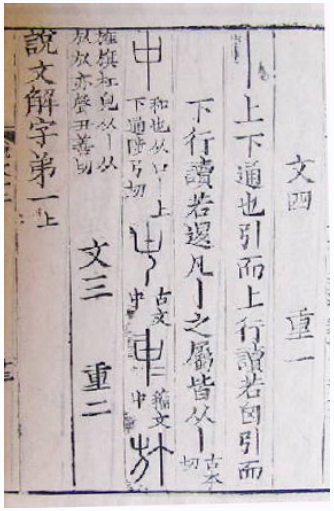
一と二は単体文字の「文」三と四は複体文字の「字」そして一、二、三、四は造字の原則である。五と六は用字の原則であるが、許慎による明確な説明もなく諸説あって定説がない。

『説文解字』のテキスト

原本は残っていない。許慎が書いてから約７００年後の唐代の写本が残っている。これは親字が懸針体で書かれている。十世紀半ばの宋代の徐鍇によるテキスト（小徐本）と徐鉉によるテキストがある（大徐本）これは印刷である。清の段玉裁の『説文解字注』（段注本）は注釈の最高峰といわれている。







『説文』以後の字典

晋の呂忱の『字林』（１万２８２４字所収）

後魏の楊承慶『字統』（１万３７３４字所収）

梁の顧野王『玉篇』（１万６９１７字所収）

清の『康熙字典』（４万７千字に達する）など